

『古代アメリカ』17, 2014, pp.25-52

<論文>

ワリ帝国の行政センターと地方統治 —ペルー北部高地エル・パラシオ遺跡の事例—

渡部森哉
(南山大学)

【要旨】

インカ帝国の行政センターは、ヨーロッパの都市とは異なり、恒常に人間が生活する場ではなかったとされる。それは中央集権的国家において、地方統治のために設置された装置であり、道路によって結ばれていた。そして人々の労働、物資をコントロールし、それを儀礼的に意味づける場であった。インカ帝国の祖型として捉えられるワリ帝国でも地方支配のため行政センターが建設された。ただしインカ帝国の行政センターが開放的プランで、インカ様式土器が多く出土するのに対し、ワリ帝国の行政センターは閉鎖的プランで、ワリ様式土器は少数であるという違いがある。またワリの行政センターは、長方形を基準とした建造物が計画的に配置された第1タイプと、不規則な建造物が集合した第2タイプに大きく分類することができ、前者はインカ帝国の行政センターのように恒常に生活する人々が少なかったが、後者は首都ワリ遺跡との共通点を有し、前者よりも人口密度が相対的に高かったと考えられる。

カハマルカに位置するエル・パラシオはワリ帝国の第2タイプに属する行政センターであり、ペルー北部高地はワリ帝国の直接支配下にあったと考えられる。エル・パラシオではワリ文化の建築構造、墓が確認されている。一方で在地の土器製作伝統は維持され、出土土器のほとんどはカハマルカ文化のものである。中央集権的社會であるワリとそうではない社會カハマルカの間では、文化的融合が起こりにくいことが、その一因と考えられる。

【キーワード】

国家、帝国、行政センター、都市、インカ、ワリ、カハマルカ

【目次】

1. はじめに
2. インカ帝国の行政センター
3. クスコ
4. 民族集団、地方、役職
5. ワリ帝国の行政センター

6. エル・パラシオ遺跡の事例
 7. 行政センターと都市
 8. ワリ帝国の地方統治
 9. おわりに
-

1. はじめに

アンデス研究の泰斗ジョン・V・ムラは、1960年代に巡察記録（visita）^(註1)という新しいタイプの史料を研究に導入し、また考古学データと文書記録を突き合わせることでインカ帝国の総体的な理解を目指した。事例として取り上げられたのはペルー北部高地南部のワヌコ地方であり、それはその地方に関する巡察記録が発見されていたためである [Ortiz de Zúñiga 1967/1972]。また保存状態よく残っていたワヌコ・パンパ遺跡（図1）が集中的な発掘調査の対象とされ、クレイグ・モーリスとドナルド・トンプソンがその調査を担った [Morris 2013; Morris and Thompson 1985]。

当時の問題の1つは、ワヌコ・パンパが都市であるかどうかであった。ある時期そこに集まった人々の数から判断すると都市的に見える。しかし集中している多くの建造物は一時的に使用されるのみであり、実際スペイン人はその場を再利用しようとしたが、ヨーロッパ人が住む場所ではないことがすぐに明らかになった [Murra 2002: 81-82]。つまりスペイン人はヨーロッパ的な都市との表面的類似性から、ワヌコ・パンパを利用して町作りを始めたのだが、すぐにそれがかなり違った目的で造られたことが分かり、そのまま放棄した [Morris and Covey 2005]。そこは恒常的に人間が生活する場ではなかったのである。ワヌコ・パンパはヨーロッパの都市とは異なり、単独で存在するのではなく、他の地域と連結されたネットワークの一部をなしていた。そこは行政的な機能を担う場であり、それに伴う活動は儀礼によって意味づけられたのである [Morris and Thompson 1985: 96; Ramírez 2005]。

ワヌコ・パンパ遺跡は、アンデス考古学で行政センターと呼ばれる典型的の1つであり、モーリス等の調査は後に活発化するインカの行政センター研究の先駆けであった。考古学者が行政センターと呼ぶ遺跡は一体どのような機能を担っており、いかなる特徴を根拠としてそのように判別されているのであろうか。

本論文の目的是先スペイン期アンデスに後9世紀から10世紀にかけて台頭したワリ帝国の行政センターの特徴に注目し、同帝国の地方支配のあり方を考察することにある。はじめにインカ帝国の行政センターを取り上げ、その一般的特徴をまとめる。つぎにしばしばインカ帝国の祖型と捉えられるワリ帝国 [ルンブレラス 1977; ロストウォロフスキ 2003: 47-48] の行政センターの事例を、インカ帝国をモデルしながら比較検討する。具体例として筆者が2008年に発掘調査を開始した、ペルー北部高地カハマルカ地方に位置するエル・パラシオ遺跡のデータを取り上げる。

2. インカ帝国の行政センター

一般に考古学では、建築物が集中した大規模な遺跡はセンターと呼ばれ、当時の社会の活動の拠

点と捉えられる。そしてその性格によって祭祀センター（ceremonial center）、都市的祭祀センター（civic-ceremonial center）、政治センター（political center）、行政センター（administrative center）などと形容される。形成期のチャビン・デ・ワンタルやクントゥル・ワシなどの神殿は祭祀センター、モチエ文化の大規模な遺跡は政治センターと呼ばれ、諸センター間で相互交流はあったものの、それらの間の序列関係は必ずしも想定されない。一方で行政センターは、中央集権的社会における行政の中心（首都^(註2)）との関係を前提とし、それ以外の大規模な遺跡を指す場合がほとんどである。地方支配の拠点と想定されれば地方行政センターと呼ばれ、その名称はあらかじめ階層的行政構造を含意している。

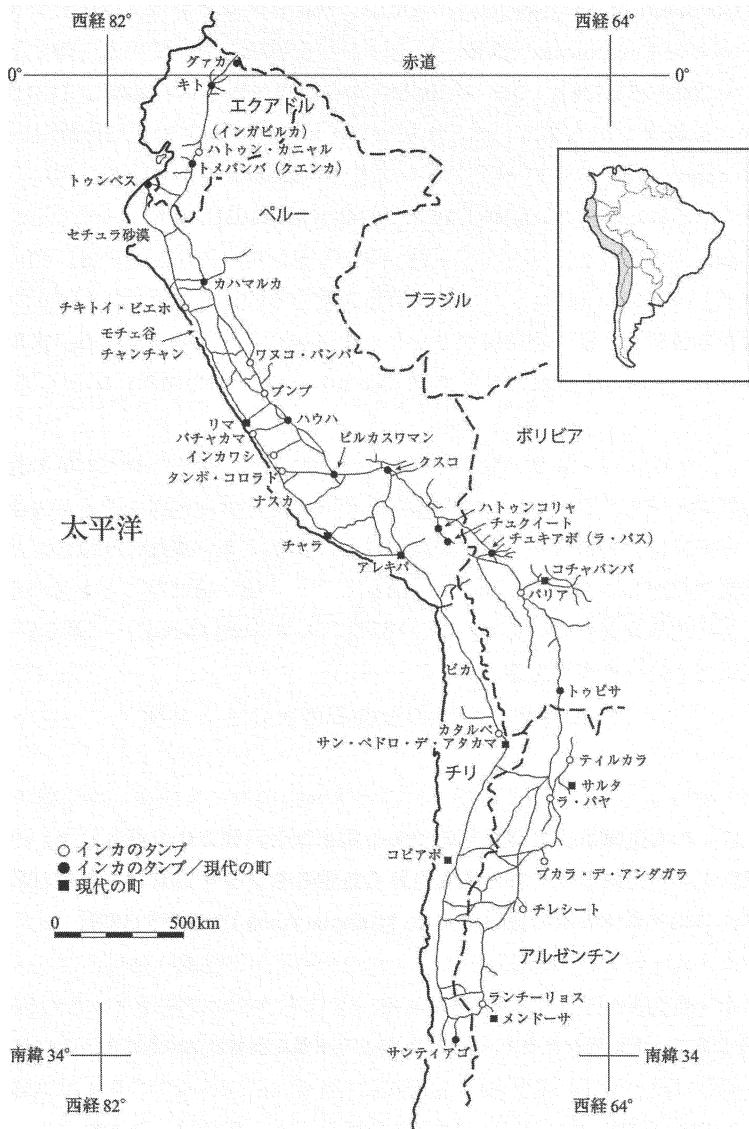


図1 インカ帝国の行政センターとインカ道 [渡部 2010]

インカ帝国の場合、ワヌコ・パンパなどのこうした行政センターは、支配の及ぶ地域の要所に配置され、そしてそれらはインカ道によって連結されていた（図1）[Hyslop 1984, 1990]。では一体こうした行政センターは当時どのように呼ばれていたのであろうか。スペイン人の兵士であり記録者ペドロ・デ・シエサ・デ・レオンは、スペイン人自ら設計し建設した町をシウダ（ciudad：都市）、またシウダよりも小規模のものをビリヤ（villa：町）と呼んでいる〔シエサ・デ・レオン2006, 2007〕。またビリヤはシウダとしばしば置換され、コロンビアのパストなどを指す場合にその例が認められる。一方でシエサ・デ・レオンは元々アンデスにあった行政センターをプエブロ（pueblo：村）、あるいはタンボ（tambo）と呼び、シウダと明瞭に区別している〔例：ワマチュコ；シエサ・デ・レオン2007: 439〕。タンボはケチュア語のタンプ（tampu）がスペイン語化した単語であり、宿泊地を意味する[González Holguín 1989: 336]。またシエサ・デ・レオンは、行政センターを形容するにしばしばアポセント（aposento：部屋、宿泊）という単語も用いている〔例：トメバンバ；シエサ・デ・レオン2007: 257, 328〕。つまり行政センターを宿泊地として認識していたのである。

一方で先住民の記録者であるフェリペ・グアマン・ポマ・デ・アヤラは行政センターに対して、タンボ・レアル（tambo real：王のタンボ）、タンビリョ（tambillo：小さいタンボ）というケチュア語の名称を用いている[Guaman Poma 1987: 1084 [1094]-1093 [1103]]。同時にシウダ、ビリヤ、メソン・レアル（mesón real：王の宿）というスペイン語の単語もタンボと併用している。例えばカハマルカを指すのにシウダ、メソン・レアル、ワマチュコを説明するのにプエブロ、タンボ・レアル、タンビリョを用い両者を区別し、より小規模なセンターをタンビリョと呼んでいる。また、スペイン語でプエブロ（pueblo：村）と訳されたリヤクタ（llacta）とタンボを明瞭に区別している〔cf. 渡部2007〕。

以上のように、シエサ・デ・レオンはアンデスの行政センターをヨーロッパ的な都市シウダから区別し、それらをプエブロ、アポセントと呼んだ。そしてグアマン・ポマはインカ道沿いに配置された行政センターをアンデスの村リヤクタから峻別し、大きくタンボというカテゴリーで捉え、それを規模や重要度で細別し、タンボ・レアル、タンビリョと使い分けたことが分かる^(註3)。注目したいのはこうした行政センターのいくつかが、「別のクスコ（otro Cuzco）」、「新しいクスコ（nuevo Cuzco）」と呼ばれたという事実である。

3. クスコ

行政センターの1つの基準は、首都が明確である国家社会の地方に位置するという点である。インカ帝国の首都はクスコであり、それと識別される各地のセンターはタンボと呼ばれた。この点で興味深いのはグアマン・ポマの次の記述である[Guaman Poma 1987: 185 [187]]。

「キト、トゥミ（トメバンバ）、グアヌコ（ワヌコ・パンパ）、ハトウンコリヤ、チャルカスにそれぞれ、別のクスコを設置し、その頂点をクスコとし、地方から首長を会議に集めること。これを法とする。」^(註4)



図2 インカ帝国の征服過程 [渡部 2010]

つまり5つの場所に「別のクスコ」設置することを命じたという。インカ道で繋がれた各地の行政センターのうち特に重要ないくつかがクスコと呼ばれたことは確かである。この事実からどのような意味を読み取ることができるであろうか。歴史学者スザン・ラミーレスは、インカ王ワスカルが「クスコ」、その父であるワイナ・カパックが「クスコ・ビエホ（老クスコ）」と呼ばれていたことに注目し、クスコが一義的には場所ではなく、人、役職を示すカテゴリーであると主張する [Ramírez 2005]。しかし別稿で論じたとおり、筆者はクスコという概念は本来場所と結びついており、そこを治める役職をクスコと呼ぶのは二義的であると考える [渡部 2007]。そもそも仮にクスコが人、役職を指す概念であったら、クスコと呼ばれる諸行政センター間に序列などはないことになる。しかし考古学的に各行政センターの遺跡を比較してみれば、規模と複雑さという基準からペルー南高地のクスコが首都、中心であり、他の遺跡との間に序列が存在することは明らかである。

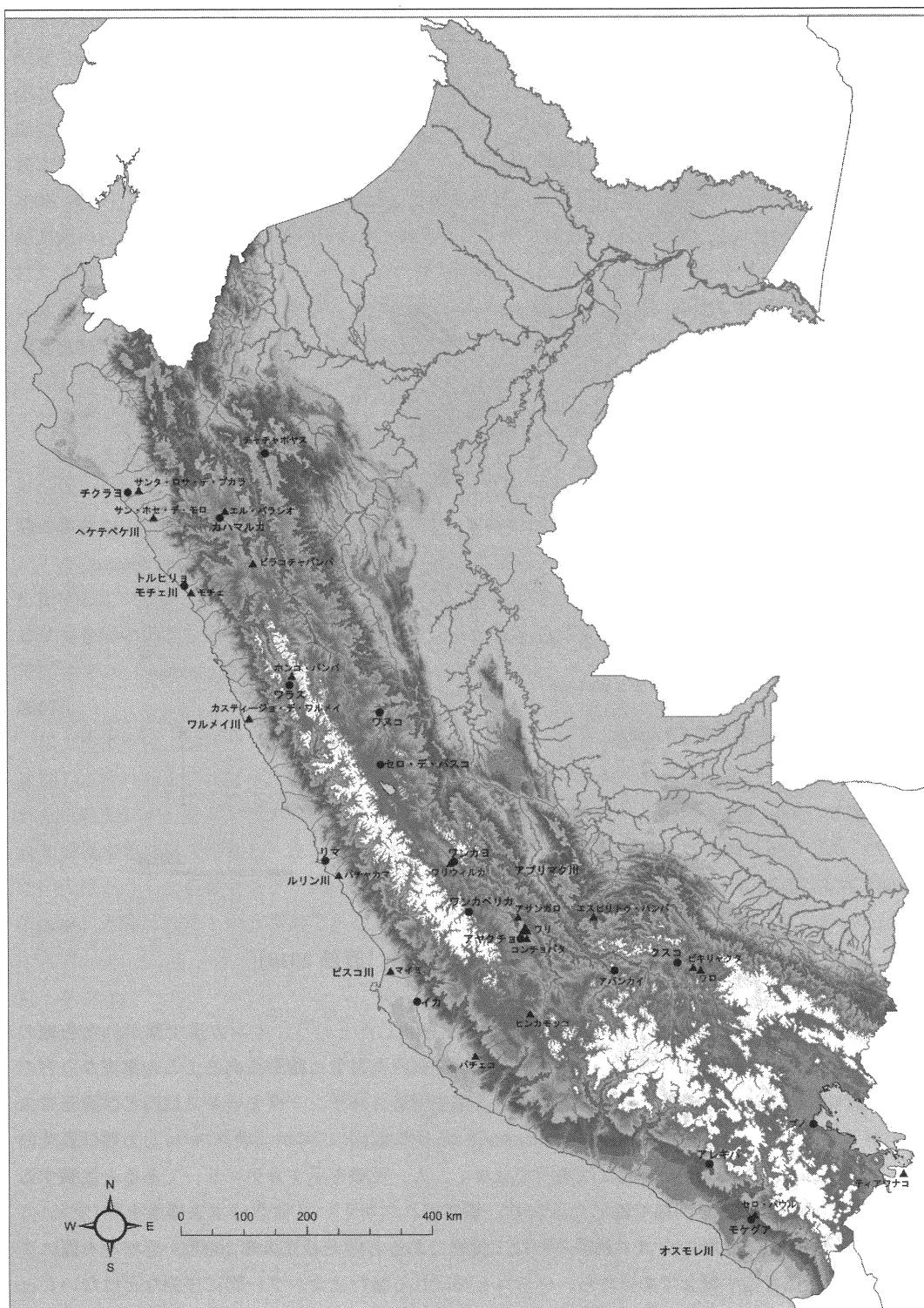


図3 ワリ関連遺跡（▲遺跡、●現在の町）

地方の「別のクスコ」はすべて考古学で行政センターと呼ばれる遺跡群に内包され、首都と同様の機能の一部を担っていたと考えられる。ただし「別のクスコ」であるキト、トメバンバ、ワヌコ・パンパ、ハトゥンコリヤ、チャルカスを他の遺跡と区別するための明確な考古学的基準があるわけではない。例えば太陽の神殿の有無とは対応していない。一方で「別のクスコ」がある時期に特定のインカ王と結びついていた可能性はあり、例えばトメバンバ（トゥミパンパ）はインカ王ワイナ・カパックのパナカ（各インカ王の親族集団）と同一名称であり [Cobo 1964: tomo 92, 93; ガルシラソ 2006: (四), 364; Sarmiento 1947: 251]、キトはワイナ・カパックの息子アタワルパが拠点を定め、その異母兄ワスカルと対峙した場である。しかしキトを除く全ての「別のクスコ」はパチャクティの治世に支配下に入った地域内に位置しているため、建設を始めた王と直接的に結びついているわけではない（図2）[Pärssinen 1992: 71-140]。場所としてのクスコと役職としてのクスコの関係と同様に、本来場所に結びついた概念である「別のクスコ」の名称が、パナカやその他の名称に転用されたという可能性もある。たとえばチャルカスは行政単位、民族集団の単位でもある [Pärssinen 1992: 120-122, 261-269]。もう1つ考えられるのは、クスコ周辺に存在した各インカ王の王領（royal estate）を、クスコから遠く離れた場所にも創出する動きがインカ帝国の後期に現れており、ワイナ・カパックはトメバンバを、アタワルパはキトを王領に転用しようとしたという可能性である。王領は王の死後その親族集団パナカの成員によって管理された施設であり、パチャクティ王のマチュピチュ、トパ・インカ・ユパンキ王のチンチェロ、ワイナ・カパック王のユカイなどが特に有名である [ナイルズ 2012]。

一方、地方行政センターが「新しいクスコ」と呼ばれた場合もある。例えばファン・デ・ベタンソスは、アタワルパがキトに新しいクスコを建設しようとしていたと書いている [Betanzos 2010: 283, 294; シエサ・デ・レオン 2007: 422]。インカ帝国の終末期にはワイナ・カパックの子供であるワスカルとアタワルパがインカ王（サパ・インカ）の座を求めて争っていたことが知られているが、アタワルパはエクアドルのキトに新しいクスコを建設することを意図していたというのだ。

さらに現在のペルー中央海岸南部のカニエテ川流域にあるインカワシ遺跡の事例は興味深い。シエサ・デ・レオンによれば好戦的な民族グアルコを征服するためにインカ王トパ・インカ・ユパンキはそこに「新しいクスコ」を建設するように命じた [シエサ・デ・レオン 2006: 321, 2007: 401]。それは現在のインカワシ遺跡と同定されている。興味深いことに、グアルコを征服した後、その施設は放棄されてしまったのである [Hyslop 1985]。ワヌコ・パンパをはじめとするインカ帝国の行政センターは特定の目的で建設されており、それ以外の目的に転用されることはありませんでした。実際、スペインの植民地時代に行政センターは、カハマルカのように完全につぶされ、その上に新しい町が建設されたか、あるいはワヌコ・パンパやプンプのように放置されたままになったかのいずれかである。行政センターの放棄は、それを建設したインカ帝国が征服され機能を停止した場合に限定されるわけではなく、インカワシの事例のようにインカ帝国の地方支配の戦略として放棄された場合もあったのである。

モーリスらが述べるように、行政センターは単独で存在しているのではなく、道路網によって連結された巨大なシステムの一部であり、その意味で役割分担があったともいえる。同時に、イアン・ファーリングトンやフリアン・イディリオ・サンティリヤナが述べるように、クスコのイメージは程度の差はあれ、地方に移植され、模倣された [Farrington 1998; Santillana 2012: 120]。そしてそのイ

メージは、シトゥア、カパクチャ（カパク・フチャ）などの儀礼によって想起され、地方と首都が結びつけられる必要があった [Farrington 2013: 345-351]。つまり「別のクスコ」をはじめとする行政センターは、地方支配の装置であると同時に、首都のコピーであると理解できる。そしてクスコを意識して建物を建設するために、わざわざクスコ地方の切石場ルミコルカからエクアドルまで石材が実際に運ばれた事例も報告されている [Ogburn 2004a, 2004b]。インカ帝国の事例では地方が首都クスコを模倣するという志向性を有しており、それは首都を中心とし、その他の場を明確な序列、ヒエラルキーに従って識別し、機能を分散させるシステムとは異なっている。

インカの行政センターは理念的に首都クスコを模したものであるが、そのプラン（設計図）は類似しているわけではない。クスコにはコリカンチャ、ハウカイパタという中心となる2つの広場があり、後者の中央にウスヌと呼ばれる儀礼用構造物があった [Farrington 2013]。一方で多くの地方行政センターでは、中心に広場が1つあるのみであり、そこにウスヌが配置される。特にインカ帝国の4つのスユの1つチンチャイスユにおける地方行政センターにおいてこの傾向は顕著であり、実際にワヌコ・パンパにおいても2つの広場があるのではなく、1つの広場の周りに建物が配置されている [Morris and Thompson 1985]。つまり地方行政センターのプランは、クスコ全体ではなくその一部を強調して展開したものと考えた方がよい。

インカという国家社会における行政センターは、部分的にではあるが理念的に首都を模倣している。行政センター間に認められる差異は、センター間の競合関係に起因するわけではなく、首都クスコの要素の取捨選択の仕方や各地の歴史的背景によるものと考えられる。それは、アンデス形成期の諸祭祀センター間に想定される、センター間の相互交流の結果生じる建築プランや土器、図像の差異とは異なっている。

4. 民族集団、地方、役職

インカ帝国は支配者集団であるインカ族が、約80、あるいは100以上ともいわれる民族集団を支配下に治めた政治組織である。そこでは十進法による住民統治が行われた。最大規模の行政単位が大まかに民族集団に対応し、数千から数万世帯であり、グアマニー (*guamaní, guamanin*) と呼ばれた [Anónimo 1920: 60; Guaman Poma 1987: 738 [752]; Pachacuti Yamqui 1993: 229, 248; Santillán 1968: 105]。グアマニーはケチュア語で鳥のタカをも意味し、鳥はインカ帝国で重要であった3種類の動物の1つである [渡部 2010]。アイマラ語でも同様にタカ (halcón)と同じ単語であるママニ (*mamani*) が地方を意味した [Bertonio 2006: 603]。スペイン人はそれをナシオン (nación)、あるいはプロビンシア (provincia) と呼び、例えばシエサ・デ・レオンの記録文書の中では、地理的範囲を示すのに、プロビンシア、コマルカ (comarca) などが用いられている。地方の統治のために行政単位が設定され行政センターが建設されたが、全てのグアマニー、民族集団にそれぞれ対応する行政センターが確認されているわけではない。グアマニーの中でも特に有力のものは「首邑」 (cabeza de las provincias) [シエサ・デ・レオン 2007: 413, 420, 435, 568-569] と呼ばれた。そこには大規模な行政センターが建設され、それらのいくつかが「別のクスコ」に相当した [cf. Pärssinen 1992: 268]。例えばカハマルカは首邑であったが、「別のクスコ」ではなかった。

インカ帝国内部には有力な民族集団（グアマニー）があったものの、各民族集団間に明確な序列

関係があったわけではなく、むしろ水平方向の紐帶が維持され、諸民族集団は十進法に基づく入れ子状の行政組織に組み込まれた〔渡部 2010〕。さらに「特權によるインカ」というカテゴリーが創りだされ、大まかにとらえれば支配者集団であるインカ族とそれ以外の民族集団という二分的な関係が軸となっていた〔渡部 2009a〕。

また、行政のための様々な役職があったことが記されている。例えば、ペドロ・サルミエント・デ・ガンボアは、ハトゥン・ハウハとティワナクの2つにスヨヨク・アポ (*Suyoyoc Apo*) という行政官が置かれていたと述べている [Sarmiento 1943: 136]。インカ帝国は4つのスユから構成され、そのうちチンチャイスユ（ハトゥン・ハウハ）とコリヤスユ（ティワナク）にこの役職が置かれたことになる。また4つのスユのなかでこれらの2つの名称は、チンチャ族、コリヤ族という特定の民族集団に対応し、他の2つのスユであるアンティスユ、クンティスユとは異なっている。

さらにスユよりも小さいが、各グアマニー（地方）よりも大きい単位に対応する役職があったようであり、マルッティ・ペルシネンはこれをハトゥン・アポカスゴス (*Hatun apocazgo*) と総称し、このカテゴリーがグアマン・ポマのいう「別のクスコ」に対応するのではないかと考えている [Pärssinen 1992: 261-269]。

さらに各行政単位グアマニーを監視する行政官トクリコク (*tocricoc*) がいた [Pärssinen 1992: 269-293]。それは民族集団の首長（カシーケ・プリンシパル）が治めていた各行政単位を、インカ王、インカ族の側から監視する役職者である。彼らは査察のために各行政センターを訪れたとされている。

以上のインカ帝国の事例を参考して、次にワリ帝国の行政センターについて考えてみたい。

5. ワリ帝国の行政センター

ワリは1940年代に考古学的に文化として認定され、1956年にはジョン・H・ロウが「国家」 [Rowe 1956]、1964年にはドロシー・メンゼルが「帝国」という概念でその政治組織を言い表した [Menzel 1964]。彼らはインカ帝国をモデルとして、それとの類似性により、ワリを記述したのである。首都はペルー中央高地南部のアヤクチオ地方に位置するワリ遺跡と同定された。そして当初から注目されたのは、クスコ地方にあるピキリヤクタ遺跡、及びペルー北部高地ワマチュコ地方にあるビラコチャパンパ遺跡である（図3）。両遺跡の設計プランが類似しているため、同一の政体によって建設されたセンターと想定された。これらの遺跡は現在のワリ研究においては行政センターとして記述され、確かにその分布パターンはインカ帝国のケースと類似している。また遺構としては確認されてはいないが、道路も整備されていたと考えられている [Schreiber 1991]。

その後ワリ帝国の各地の行政センターの調査が積み重ねられ、ペルー南高地に位置するヒンカモシコ、ペルー中央高地に位置するアサンガロ、ワリウィルカといった遺跡が調査された [Isbell and McEwan, eds. 1991]。その判定の基準は共通する建築構造である。壁が直交し、外壁を先に建てて次に内部を分割する建設順序、中庭の周りに部屋状構造が配置される設計、同じ建築単位が反復することなどが特徴である [Isbell 1991]。その後、平面がD字形プランの建築物もワリ文化の要素と認識されるようになり、首都ワリ以外に、アヤクチオ地方のコンチョバタ遺跡、ペルー北部カイエホン・デ・ワイラス盆地のホンコ・パンパ遺跡、ペルー南部モケグア谷のセロ・バウル遺跡などの

地方センターでも確認された [Cook 2001]。興味深いことにこうした D 字形の建築物は不規則な建築が並ぶ遺跡に確認されており、ピキリヤクタなどの直交する建築構造には伴わない。そのため、これまで行政センターと一括りにしてきた遺跡群を少なくとも 2 つのタイプに分類することが必要である。本論文ではワリ関連遺跡のうち、直交建築構造の諸遺跡を第 1 タイプ（ピキリヤクタ、ビラコチャパンパ、アサンガロ、ヒンカモッコ）、不規則な建築構造が集合した諸遺跡を第 2 タイプ（コンチョパタ、セロ・バウル、ワロ、ホンコ・パンパ）として記述を行う。また奉納、墓など、地方における行政センター以外のワリ関連遺跡を体系的に分類し、それぞれの性格を理解することが今後の課題である。

こうしたワリ帝国の行政センターとされる遺跡は、インカ帝国の行政センターと分布パターンが類似しているが、両者の間にはいくつかの相違点がある。第一にプランそのものが大きく異なっている。インカ帝国の行政センターは、広場を中心とした開けた設計となっており、そこへの出入りが比較的自由に行われる。またその範囲ははっきりしておらず、フェイドアウトするように遺跡は広まっている。一方でワリの遺跡の多くは、外側の壁が明示され、その内部が分割されるという逆の発想の設計になっている。首都ワリ遺跡自体は全体構造が不明瞭であるが、厚く高い壁を立てて、アクセスをコントロールしていることは明らかである。こうしたアクセスのコントロールはピキリヤクタなど第 1 タイプの遺跡で典型的に認められ、またセロ・バウルなど、直交する矩形構造ではない不規則建築が多い第 2 タイプの遺跡でも、重要な要素となっている [Williams 2001]。

次に注目すべきは出土する遺物の出土傾向である。インカ帝国のワヌコ・パンパ遺跡では、調査者は発掘開始以前、そこで活動していた人々の民族的指標が土器に現れると考えていた。ところがそうして想定はデータと合致しなかった [Morris and Thompson 1985: 74]。土器はほぼ全てがインカ様式であり、在地の土器は多い場所でも 5 パーセント以下であった。土器の組成から民族集団の構成を再構成することはできなかつたし、インカ以前の利用の痕跡も認められなかつた。インカ帝国の他の行政センターでも同様に、他地域から連れてこられたミティマエスなどの民族集団を、土器を手がかりとして同定することは極めて難しい。この事実はティティカカ湖畔に位置するコパカバナを事例として、テレンス・ダルトロイが指摘している [D'Altroy 2005: 276, 292; ダルトロイ 2012: 143]。一方でワリの地方行政センターから出土するワリ様式の遺物は非常に少ない。ビラコチャパンパ遺跡では殆どワリ様式土器は出土しておらず、その周辺のセロ・アマル遺跡からワリ様式土器を含む奉納が確認されているのみである [Topic, J. R. and T. L. Topic 1992]。ピキリヤクタ遺跡でも出土土器の多くは在地の非多彩色土器である [McEwan, ed. 2005]。床下で奉納が検出された例もあるが [Tuni and Tesar 2011]、覆土からは特徴的な遺物が出土することは多くない。ヒンカモッコ遺跡でもワリ様式土器は出土土器全体の 10% 以下に過ぎない [Schreiber 1992]。つまり、建築構造に共通性が認められる一方で、出土土器におけるワリ様式土器の割合が低いことが複数の行政センターに認められる全体的な傾向である。これは首都ワリの位置するアヤクチヨ盆地の外側に位置する第 1 タイプ、第 2 タイプの両方の行政センターに共通する特徴である。

インカ帝国では、各地のセンターがクスコを理念上模倣し、クスコの物質文化を広まる働きがあつた。そしてセンターが開放的なことからも分かるように、多くの人々が参加し、インカ様式の土器を使用し、木製コップであるケロで酒を飲み交わした^(註5) [Cummins 2002; カミンズ 2012]。一方でワリの場合は、土器はむしろ同質化、模倣ではなく、差異化の働きと連動していたと考えられる。

ワリ多彩色土器は、ワリの支配者集団などが特權的に用いるものであり、他の人々が使用することはできなかったと思われる。また行政センターはアクセスが制限された閉鎖的な設計であり、狭い空間で奉納活動が行われ、多彩色で複雑な図像が描き込まれた大型土器は意図的に割られ床下に埋め込まれた。つまりその図像を目にする人は非常に限られていた。土器の社会的役割はインカ帝国とワリ帝国では異なっており、ワリの儀礼の方法は排他的であり、ワリ様式土器は特定の人々、機会に利用が限定されていたと思われる。

土器の意味を考慮すると、首都を模倣した行政センターが建設されたインカ帝国の場合と異なり、ワリ帝国の場合には首都と地方センターの間に一種の差異化の原理が働いていたとも考えられる。そのことが、例えばペルー北高地ワマチュコ地方に位置するビラコチャパンパの建築在地の特徴が強く示されている理由かもしれない [Topic 1991]。ジョン・トピックは、ビラコチャパンパの多層構造がワリ期よりも前に遡るため、ワリがワマチュコの要素を取り入れたのだと主張する。しかしそのこと自体はワリとワマチュコが対等であったことを意味するわけではない。支配下に入った民族集団の文化要素を取り入れ、それを広めることはインカ帝国でも認められることである。特にワマチュコ地方では土器ではなく建築伝統を重んじた文化が発展していたことを考慮すれば、建築に独自性が認められることはおかしくはない [Topic, J. R. and T. L. Topic 2001: 183, 187; Topic, T. L. and J. R. Topic 1987: 1, 20]。ワリ期の建築の地域性は、ワリの支配の弱さを示すのではなく、各地の文化伝統、技術と結びついており、ワリ帝国があえて押しつけをしなかった文化的側面を示している。そのため地方行政センターと首都ワリの間に相違点があることを、地方の主体性からではなく中央の戦略から説明することができる部分もある。建築の特徴のみならず土器の特徴などにも、ペルー北部高地のレクワイ文化の土器紋様など [Lau 2014]、地方の文化から取り入れられた例がある。インカ様式の土器の場合でさえも、クスコの在地の人々がティティカカ湖周辺の土器の要素を取り入れた可能性もある [cf. Pärssinen and Siiränen 1997]。またインカ帝国においては地方インカ様式という土器群が存在するが、それらはインカの支配域で製作されたものであり、対等な立場の間での交易の結果などでは決してない。つまり、地方にワリ文化の規範的な特徴がセットで現れないことは、必ずしもワリ帝国の支配の弱さを示すわけではない。

現在のところ、建築構造に類似性が認められ、少数であってもワリ様式の遺物が共伴、あるいは周辺の遺跡で確認できる場合にワリ関連遺跡と判定される。またワリの行政センターと判定されるためには、ワリ期に建設が始まり、ワリの終焉と共に放棄されるという時間的整合性が必要である。つまり行政センターは既存の建築を再利用して建設されたわけではなく新たに建設され、ワリ帝国の崩壊後に引き続き利用されることとはなかった。

ワリ帝国の支配装置である行政センターは点としてのみ見つかっており、ワリ文化の面的な広まりは認められない。しかし行政センターの立地が限定されることには、必ずしも支配力の弱さを示すわけではないと考えられる。インカ帝国でも、比較的安定した支配が行われた地域では、1つのセンターの管轄する範囲が広く、その規模は大きくなり、インカの証拠は点として現れ、その周辺に他のセンターを見つけることはできない。逆に反抗的な人々が生活し支配が安定しない土地では各行政センターの管轄する範囲が狭くなり、近隣に複数の行政センターが建設され、分布密度が増大すると考えられる。例えばワヌコ・パンノパ遺跡やカハマルカの近隣にはインカの証拠を見出すことは難しいが [Grosboll 1993; 渡部 2010]、逆にインカ族に反抗的であったカニヤリ族とチャチャポヤ

ス族の本拠地であったエクアドル高地と [大平 2008]、北部ペルー東斜面チャチャポヤス地方では多くのインカの遺跡が確認されている [シェレルップ 2012]。

以上の考察を踏まえ、次にワリ帝国の行政センターの 1 つエル・パラシオ遺跡の事例を取り上げてみたい。

6. エル・パラシオ遺跡の事例

ペルー北部高地カハマルカ地方にエル・パラシオ遺跡は位置する (図 4)。1960 年代にルイス・G・ルンプレラスが言及して以来、ワリ文化の遺跡とされてきたが、発掘調査が行われなかつたため、その文化的特徴、時期などは不明であった [Isbell 1988: 186; Julien 1988; ルンプレラス 1977; Ravines 1985: 112-113; Schreiber 1992]。2008 年より筆者は同遺跡で発掘調査を開始した [渡部 2009c; Watanabe 2011, 2014]。その結果、同遺跡がワリ期の大遺跡であること、同じ場所で建造物の建て直しが複数回行われていること、埋葬や奉納が行われたこと、ワリ様式土器が墓や奉納のコンテクストに限定されず破片として覆土から出土すること、黒曜石やスポンディルス貝製品が出土することなどが明らかになった。エル・パラシオの大部分は地表下に埋もれているためその全容は不明であるが、元々遺構の壁石であったものが現在の土地の区画に利用されており、その分布範囲から判断すると 100 ヘクタールはあると思われる。遺跡全体のプランは明らかではないが、これまでのデータを総合すると第 2 タイプの行政センターの 1 つと考えることができる。

カハマルカ地方で形成期の後に発展したカハマルカ文化は、早期 (50B.C.-A.D.200)、前期 (A.D.200-600)、中期 (A.D.600-950)、後期 (A.D.950-1200)、晩期 (A.D.1200-1532) の 5 つの時期に分けられている [Terada and Matsumoto 1985; Watanabe 2009b]。発掘の結果、エル・パラシオはカハマルカ中期から後期はじめにかけての時期に建設利用されたことが判明した。中期は中期 A (A.D.600-750)、中期 B (A.D.750-850)、中期 C (A.D.850-950) に細分されており、中期 B のはじめにはすでにワリとのコンタクトがあったことが確認されている。

カハマルカ盆地ではエル・パラシオ遺跡、及びその近隣に位置するコルギティン遺跡、チヨンドルコ遺跡を除いて、ワリ様式土器は確認されていない [Reichlen and Reichlen 1949; Terada and Matsumoto 1985]。2001 年から 2003 年にかけてカハマルカ盆地で集中的な遺跡分布調査を実施した関雄二らがワリ様式の遺物を確認したのはエル・パラシオ遺跡のみであり [Seki and Tejada 2003; Seki and Ugaz 2002; Seki *et al.* 2001]、1983 年から 1984 年にかけて遺跡分布調査と 4 つの遺跡で小規模な発掘調査を実施したダニエル・ジュリアンはワリ様式土器を 1 点も発見できなかった [Julien 1998: 240]。エル・パラシオよりも東に位置するヤモバンバ遺跡の建築プランがワリ的であると指摘されているが、ワリ様式の遺物は確認されていない。カハマルカよりも南のワマチュコにビラコチャパンバ遺跡が位置することから、コンデバンバ川からカハマルカ川沿いを通るインカ道と同じルートがすでにワリ期に利用されていたことは確実であり、その途中に位置するイチャバンバ遺跡もワリの遺跡である可能性が指摘されている [Williams and Pineda 1985]。

エル・パラシオ遺跡がワリの遺跡と認定してきたのは、遺跡の北端の A 区に位置する矩形建造物がワリの建築構造と類似点を示しているためである (図 5)。また一方で、ワリ、コンチョパタなどワリ文化の諸遺跡でカハマルカ様式土器が出土していることも、カハマルカにワリの遺跡が

存在する状況証拠とされてきた [Watanabe 2002]。最も南の例ではモケグア谷のセロ・パウル遺跡でもカハマルカ様式土器が出土しているという [Nash and Williams 2009: 264]。しかし2008年の発掘調査で確認した通り、A区の建造物はエル・パラシオの利用の最終期であるカハマルカ後期の始めに建設が始まっており、それは完成前に放棄された [渡部 2009c; Watanabe 2011]。そのため例えば内部の空間の分割など、典型的なワリの建造物の特徴を示していない。

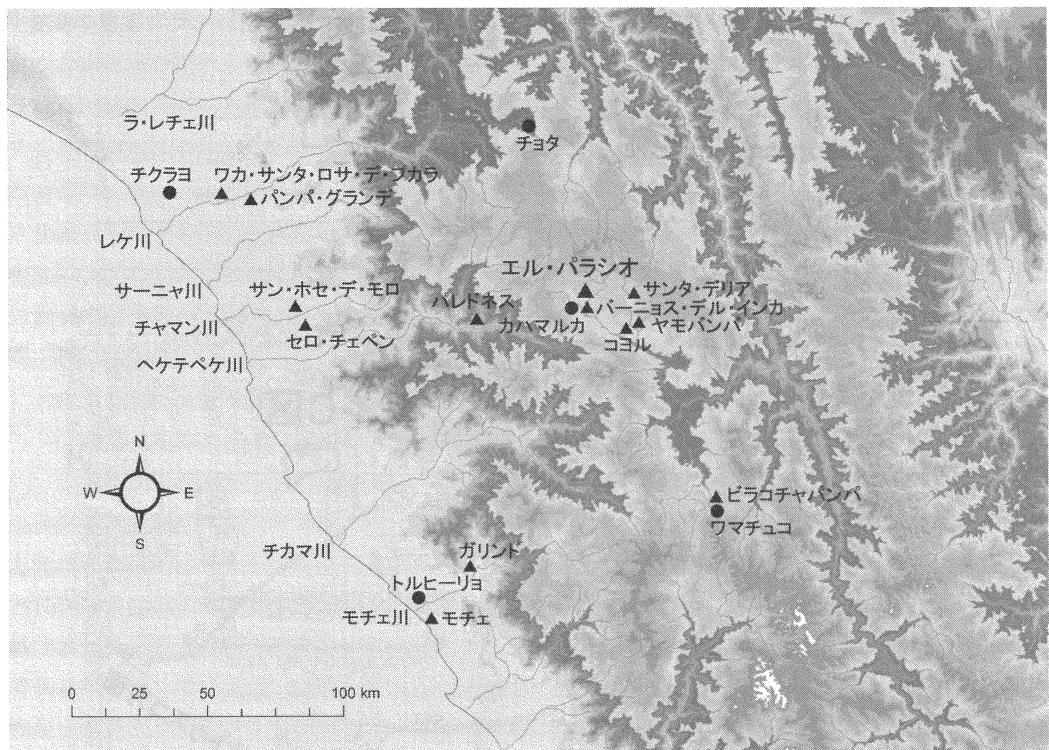


図4 ペルー北部におけるワリ関連遺跡（▲遺跡、●現在の町）

2008年にはA、B、Cの3つの発掘区を設定し（図5）、いずれもの箇所でもワリ様式土器が出土した [Watanabe and Peña 2009]。建築構造の複雑な重なり合いが確認できたB1区で2010年に集中的な発掘を実施した [Watanabe and Luján 2011]。B1区から得られた資料の放射性炭素年代から判断すると、カハマルカ中期Bからカハマルカ後期はじめの後800–1000年頃に主に利用されたと考えられる。ただし、B1区は低い場所に位置するため地下水位が高く深く掘り下げることが困難であったため、建設の始まりに關係する層から出土した資料の年代測定はされていない。そのためその始まりはより古くに遡る可能性がある。またこの遺跡の建物がどこから建設され始めたか不明であり、発掘した箇所が遺跡全体の中でどのような部分に位置するのかも分からぬ。2012年にはB1区での発掘調査を継続するとともに、エル・パラシオの建設の始まりを確認する目的で、丘の斜面に位置するC区で発掘調査を実施したが、それがカハマルカ中期Aに遡るという証拠は確認できなかつた [Watanabe and Rivas 2013]。またB1区からおよそ100メートル離れた地点にB2

区を設定し発掘を行った結果、B1 の建築物と同じ方向軸の建築物が検出された。つまり当初から明確な計画に従った広範囲に亘る建築活動があったといえる。また B2 区でもカハマルカ中期 B にワリの建築物の建設が始まっており、その直前のカハマルカ中期 A にはその場所が利用されていなかったことも確認できた。前時代の建築を再利用することなく、新たに建物を建設していることはエル・パラシオ遺跡の全ての発掘区で確認できている。

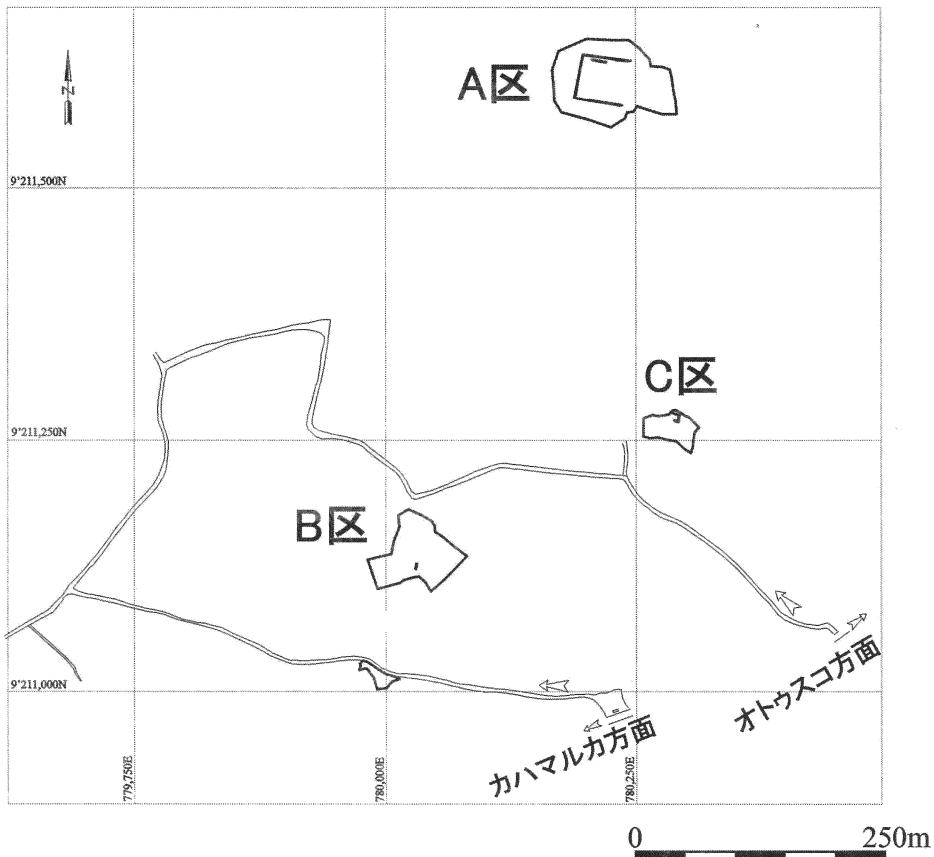


図 5 エル・パラシオ遺跡の発掘区の位置

エル・パラシオの大規模な建築構造は、小規模な建築物を少しづつ改修するカハマルカ文化の特徴とは大きく異なっており、外来の特徴を示している。2010 年の発掘調査では 6 期に亘る建築フェイズが確認された。はじめの 3 期はカハマルカ中期 B に対応し、この時期に大部分の構造物ができあがった。次のカハマルカ中期 C (第 4 期) には、半地下式の墓 (EST-B2) に埋葬が行われ、その周辺に埋葬、奉納が行われた [渡部 2009c; Watanabe 2011, 2014]。B1 区ではこの時期に対応する埋葬、奉納が多く確認されており、いくつかの建築物が埋められた。カハマルカ後期 (第 5 期) まで建築活動が継続しており、A 区の建物の建設がこの時期に比定されるように、外側に建築活動

が広がっていった時期と考えられる。しかしB1区におけるカハマルカ後期の壁の造りは粗雑であり、多くは建設途中であった。この遺跡が放棄された後のカハマルカ後期の後半には墓地として利用され、二次埋葬の集合墓が2基確認されている。カハマルカ晚期の証拠は確認できておらず、最後の建築フェイズ（第6期）は植民地時代に対応し、教会あるいは礼拝堂と考えられる建築物の基礎部分が確認されているが、建設途中で放棄されている。また意図は不明であるが、この建物の内部に大きな穴が開けられている。2012年の調査で確認できたB1区におけるカハマルカ中期Bの最終期の建築プランは図6のようになる。

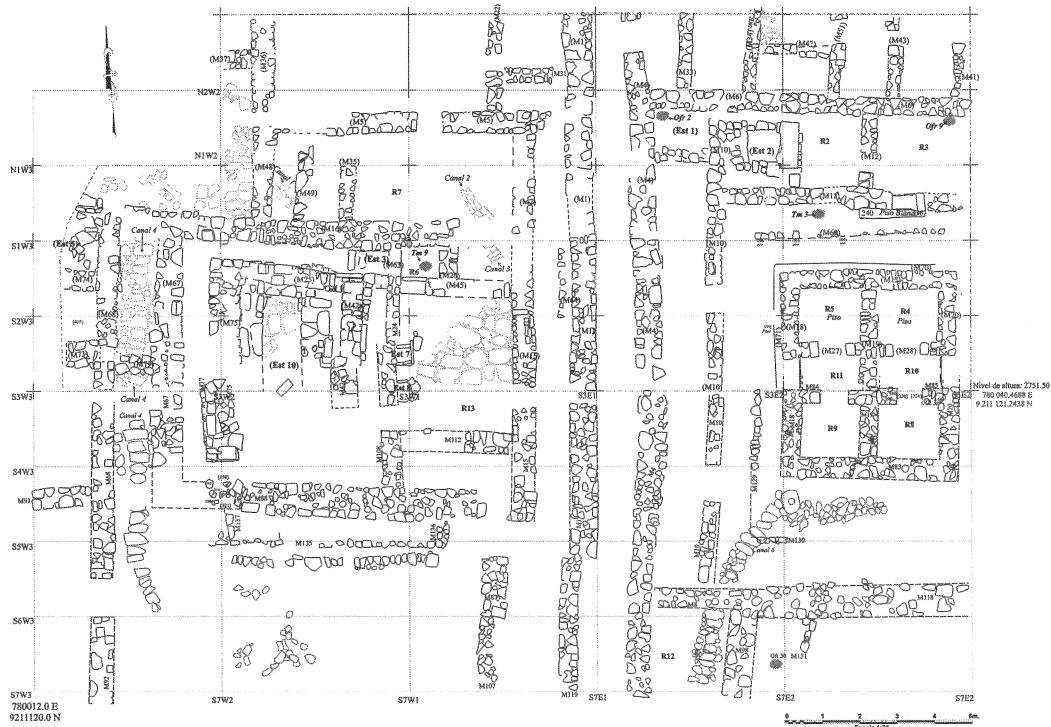


図6 エル・パラシオ遺跡B1区の建築プラン

B1区で確認された建築物は複合的な特徴を示している。まず2008年に調査を行った半地下式の墓EST-B2がある。内部は荒らされていたがその周囲には奉納品が確認できている。また大きな壁(M1)を基準としてその反対の西側には、水槽と考えられる構造物EST-B10を中心としてその周りを通路が取り囲む構造物が確認されている。その東側には平石が敷き詰められた部屋状構造があり、床面直上でカハマルカ中期Cの奉納が確認された。そこでは側面に帯状に隆起した紋様を伴う平底鉢が複数意図的に割られていた。またアクセスのコントロールは明瞭で、遺跡内を自由に移動することはできない。しかし、ピキリヤクタ遺跡やビラコチャパンパ遺跡にあるような長い直線通路は確認されていない。小規模な部屋状構造が多いのも特徴であるが、広場かあるいは中庭と考えられる広い空間も、2012年に確認された。また多くの水路が設置されている。

水平方向に拡張する他の行政センターとは異なり、エル・パラシオでは同じ場所で、水路を含む建築の造り替えが頻繁に行われている。この特徴が遺跡全体に認められるか、あるいはB1区に集中的に認められるかはさらに検討が必要であるが、少なくとも2012年のC区の発掘では同様の建築の造り替えが確認されている。

エル・パラシオ遺跡では大量の遺物が出土し、例えば2012年だけで6トン以上の遺物を登録した。9割以上がカハマルカ文化の土器で、残りはワリ様式土器やペルー北海岸系の土器という土器構成である。先述の通り、ワリの行政センターで、ワリ様式の遺物が少ないことは一般的な傾向である。ワリ様式の遺物が地方に現れる場合、在地の人々がワリの要素を取り入れたと解釈するか〔Castillo 2001〕、あるいはワリ帝国の支配下にあったと解釈するか〔Schreiber 2001〕、大きく2つの傾向がある。サン・ホセ・デ・モロ遺跡の事例のように、ワリ様式の遺物が在地の埋葬形態の墓の副葬品として完形品に限定される場合は、在地の人々がワリの権威を利用した、それにすがったという解釈に有利に働くであろう〔Castillo 2001〕。しかし、エル・パラシオ遺跡では、カハマルカの文化伝統とは明らかに異なる座位屈葬の集合墓と考えられる外来の半地下式の墓にワリ様式の完形土器が共伴していた。しかもワリ様式土器の多くは破片であり、極めて計画的に建設された建築の内部で、発掘区のほぼ全てにおいて確認されている。ワリ様式の遺物が墓や奉納のための完形品のみではないことがポイントであり、同遺跡がワリ帝国の支配下で建設された蓋然性は高いと言える。

しばしばワリ様式の遺物の希少性などを根拠としてワリの中央集権的支配の存在に疑義を呈する研究者がいるが〔*cf. Topic, T. L. and J. R. Topic 2010*〕、それはこれまで述べてきたように、ワリ様式土器の文化的意味から説明することができる。帝国や国家社会の場合、中央の文化が地方に浸透すると想定される。しかし帝国全体に連なる共通性が広範囲に認められる一方で、各地の民族集団や文化伝統の特徴が帝国の支配下で強調される場合もあり、それを示す指標に注目すれば地域的多様性が目立つことになる。例えばインカ帝国では、支配下で民族集団の枠組みが組み替えられ、他の集団と明確に区別されることで、各民族集団単位が明示された〔渡部 2010〕。民族集団の差異は頭飾りや衣服によって示され、各民族集団は他の場所に移動する際にそれらを変更することを禁じられた〔シエサ・デ・レオン 2007: 487; Cobo 1964: tomo 92, 113〕。図像表現の人物表現の多様性などから判断すると、ワリにも民族集団の差異を頭飾りなどで示すという同様の習慣があった可能性がある。キャサリーナ・シュライバーはワリ帝国の支配の特徴を「モザイク」と表現する〔Schreiber 1992: 5, 31, 69, 113〕。しかし、確かにワリ帝国においては物質文化の現れ方が一様でないものの、むしろ支配原理は同じで、民族集団が支配下に組み込まれるプロセスが異なっており、その結果としてワリ文化の現れ方の違いが生じると考えた方がよいのではないか。例えば、インカ帝国では地域ごとに異なる戦略を探ったにせよ、労働力のコントロールという意味では同じ方法で支配したと考えられる。

以上のように、発掘データと、エル・パラシオがワリ帝国の行政センターであったという解釈との間に矛盾はない。エル・パラシオ遺跡の建設、利用時期はワリ帝国の盛衰時期と一致する。それまで利用されていなかった更地に建設され、ワリ帝国の崩壊と共に放棄されたのである。行政センターが国家社会における首都との関係の中で定義されるのであれば、ワリの支配下で建設が始まり、その崩壊と共に放棄されたエル・パラシオ遺跡の特徴はそれに合致する。またカハマルカ中期Aに時期比定されるバニヨス・デル・インカ遺跡は、後8世紀の初めに焼かれて放棄されており、

中期 A から中期 B にかけての時期に大きな社会変化があったことを示している [Watanabe 2009b]。それはまさにワリ帝国が中央アンデスに台頭していく時期である。また、アクセスのコントロール、半地下式の墓、墓や建築の改修に伴うワリ様式の遺物、黒曜石製の尖頭器、スponディルス貝製品といった証拠がエル・パラシオとカハマルカ文化の遺跡との明確な違いを示している。ただしこのことは同時代のカハマルカ文化の遺跡を発掘調査しさらに検証する必要がある。

カハマルカ地方においてワリの証拠がエル・パラシオ周辺に集中し、カハマルカ盆地の他の場所で認められないことは、同地方におけるワリの支配の弱さを示すのではなく、むしろ逆にワリ帝国が安定した支配を確立していたことを示すと考えられる。周辺のデータが揃っていれば、エル・パラシオの位置づけ、その管轄範囲などが明らかになるであろう。例えばカハマルカ盆地よりも北のチヨタ地方にもワリ文化の証拠が断片的に認められるため、エル・パラシオは山地における最北のセンターではない可能性もある（図 4）。また海岸地帯ではランバイエケ川沿いに位置するサンタ・ロサ・デ・プカラ遺跡でワリの建築や土器の証拠が見つかっている [Bracamonte 2012]。

次に、冒頭の問題提起に戻り、先スペイン期アンデスの国家社会の行政センターの特徴を、ヨーロッパの都市と比較しつつ考察し、またインカ帝国の行政センターとワリ帝国の行政センターの間、およびワリ帝国の諸行政センター間の共通点と相違点を整理したい。

7. 行政センターと都市

クシイストフ・マコフスキは、西洋の都市との比較から、アンデスのアーバニゼーションのあり方を「反都市的」と表現する [マコフスキ 2012; cf. Tschauner and Isbell 2014: 139]。確かに西洋都市とアンデスの都市的遺跡の間に相違点があることは確かであるが、アンデスの特異性を強調するだけではなく、両者の間の共通点にも注目する必要がある。また、ヨーロッパ的な都市との相違点に着目し行政センターを画一的に記述するのではなく、インカとワリの間、ワリの行政センター間に内在する相違点を明示することで、より精度の高い議論をしたい。

インカ帝国における行政センターは恒常に多くの人々が生活する場ではなく、国家の支配のための装置であり、人々の労働、物資をコントロールし、そしてそれを儀礼的に意味づける場であった。一方で、大規模遺跡が全て行政センターであるわけではない。マチュピチュ、オリヤンタイタンボなど、いわゆる王領と分類される遺跡群は、大規模であり、特定のインカ王に仕える人々が恒常に生活していたと考えられる。その意味で西洋都市との共通点を示している。

大量の労働力を用い、1つの場に大建造物を造り上げるという行為、一時的にではあれ多くの人々が集まるという行政センターの特徴は、都市と同様である。一方で、集住傾向が弱いこと、自給自足経済を基本としていたため農村と対峙するわけでは必ずしもないこと、職業の分化の程度が低く専門化は限定されていたこと、せいぜい数百年単位で放棄されることなどがアンデスの都市的大規模遺跡の特徴である [ダルトロイ 2012 ; マコフスキ 2012]。それらが端的に示されているのが、先スペイン期の最終期のインカ帝国の行政センターであり、王領遺跡にもかなりの程度当てはまる。行政センターは国家の存続する間、王領はインカ王の親族集団パナカが存続する間利用され、それが後の時代に他の目的に転用されることはなかった。場を中心に形成され、政治組織などが変わっても同じ場所が引き続き利用されるのが西洋都市であるのに対して、コスモロジー、国家などの組

織、あるいはそれらを体現するインカ王などの特定の人を中心に形成され、その統合原理が機能しなくなった時に放棄されたのがアンデスの大遺跡の特徴である。西洋あるいは他の地域の都市との比較をさらに進め、アンデスの事例を人類史における都市化の議論に接合することが、今後の課題である。

本論文では、研究の進んでいるインカ帝国の行政センターを、それよりも古いワリ帝国の行政センターと比較対照し、両帝国の行政センターの特徴を考察した。インカとワリの行政センターの相違点についてはすでに述べたが、ここではワリの行政センターが大きく2つのタイプに分かれるこについて考えてみたい。

先述のワリの行政センターの区分に従えば、これまで発掘したデータから、エル・パラシオ遺跡は第2タイプに含まれると考えられる。第1タイプの行政センターは計画的で明確なプランを示し、外側に拡張する場合が多い。第2タイプの行政センターは全体として不規則なプランを示しているが、ホンコ・パンパやセロ・バウル遺跡など水平方向に拡張する場合が多く、エル・パラシオのように同じ場所で建物を造り替える事例は少ない。2012年の第三次発掘調査ではC区でも建築の造り替えが確認されているので、この特徴はB区周辺の狭い範囲に限定されるわけではなく、遺跡の全体的傾向である。同じ特徴が現在確認されている例としては他に首都ワリ遺跡と高地の南端の行政センターであるワロ遺跡群があるのみである [Zapata 1998]。

第2タイプの行政センターでは、D字形プランの構造物や墓を伴う例が多い。また「両手に杖を持った神」と呼ばれる図像を施した大型土器はこれまで第1タイプの長方形を基準とした規則的設計の行政センターでは見つかっておらず、コンチョパタなどの不規則な建築構造の第2タイプの行政センターやペルー南海岸のパチェコなどの奉納遺跡において出土している [Isbell and Cook 1987; Menzel 1977]。そのためエル・パラシオにD字形プランの構造物や大型土器が埋もれている可能性がある。

倉庫のような構造物が整然と並ぶ第1タイプの行政センターは、人々が恒常に住むような設計にはなっていないのに対し、それよりも小規模な建築が集合する第2タイプの行政センターでは、いくつかの建物が住居として使用されていたと思われる。労働や物資の管理、儀礼のために利用されたという点では両タイプは同じであるが、恒常に生活していた人口密度には差があったであろう。また第2タイプと共に多くの特徴を有している首都ワリには不規則建造物が集合し、かなりの人間が日常的に生活していたと考えられる。安易な一般化は避ける必要があるが、首都ワリ遺跡との関係性から行政センターの位置づけを考えることが有効であろう。

一方、インカの諸行政センター間に規模の差はあるが、それらを質的に異なるタイプに分類する基準はこれまで指摘されていない。インカ期の大遺跡を大きく行政センターと王領と区分することはできるが、それがワリの第1タイプと第2タイプの違いに対応するわけではない。インカの王領は基本的に首都クスコ周辺に位置するが、ワリの第2タイプの行政センターは首都周辺だけではなく遠隔地にも分布する。特に山地の南端の行政センターであるワロ遺跡群と、北端の行政センターであるエル・パラシオが第2タイプに属することにどのような意味があるかを今後考えていく必要がある。その北端の場所における地方統治を最後に考えてみたい。

8. ワリ帝国の地方統治

本論文の目的は、行政センターの特徴から、ワリ帝国の地方支配を考察することであった。そもそも行政センターという概念を使用することで、中央集権的社會を想定していることになるが、地方によって違いはある。最後にエル・パラシオ遺跡という個別の行政センターの事例からワリ帝国と在地のカハマルカの関係について考えてみたい。

ペルー北部地域ではワリの遺跡が断片的にしか発見されていなかったため、同地域がワリ帝国の直接支配下にあったという考えに疑問を呈する研究者がいる [cf. Lau 2005]。例えばワマチュコ地方のビラコチャパンパ遺跡を調査したトピックは、同遺跡が後 700 頃に放棄され、同時にワリ帝国は北部高地から撤退したと考えた [Topic 1991: 162]。ところがそれよりも北、つまり首都ワリからより遠くに位置するエル・パラシオ遺跡の始まり、利用時期は、想定されているビラコチャパンパの放棄年代よりも後の時期である。これをどのように考えればよいのだろうか。シュライバーはインカ期のインカワシ遺跡の事例を参照し、ビラコチャパンパは必要とされなくなったため建設途中のままになったと考えている [Schreiber 2001: 88]。戦略の変更に伴い放棄されたとすれば、どのような背景があったのだろうか。筆者はワリがまずペルー北海岸の南のモチエ（チカマ川以南）を征服しようとし、そのためモチエ川沿いに下る拠点としてビラコチャパンパの建設を始めたが、南のモチエが強固であったため、先に北のモチエ（ヘケテペケ川以北）を征服するためにヘケテペケ川沿いに下りるための拠点であるカハマルカにエル・パラシオの建設を始めた、という仮説を提示したことがある [Watanabe 2009b]。現在もその仮説は選択肢の 1 つであるが、もしビラコチャパンパの放棄がエル・パラシオと同じく後 1000 年頃であったならば、違ったシナリオになる。つまりワリ期の最終時期に大量の労働力が投入されビラコチャパンパの建設が始まったが、ワリの衰退と共に完成前に放棄されることになる。エル・パラシオ遺跡の A 区に屹立する未完成の建物は、はじめに外壁を作り、次に内部を分割するという順序に従っている。この建物はエル・パラシオの最終期にあたるカハマルカ後期のはじめに対応する。ペルー北部において規格化された建築物がワリ期の後半に現れるとすれば、ビラコチャパンパの建設・放棄年代を再確認する必要がある。ただし南の方の事例では、第 2 タイプの不規則配置のセンターであるセロ・バウルも、第 1 タイプの規格化された建築構造のピキリヤクタも、その始まりの年代に時期的な差は認められない [McEwan, ed. 2005; Williams 2002]。

しばしば中央／周辺という枠組みを援用し、ワリの物質文化は中央集権的支配の証拠であるのか、あるいは在地の人々、特にリーダーが例えればワリの権威を利用するため主体的に取り入れた結果なのかという問い合わせが設定される。それはしばしばワリは帝国か否かという問い合わせにも変換される。在地発展論に与する論者たちが依拠する証拠は、ワリ様式の遺物の希少性や、建築などに認められる非ワリ的な特徴である [Shady 1988; Topic 1991]。しかし前述のように、インカの行政センターとは異なり、ワリの行政センターにおけるワリ様式土器の割合は全出土量の 10% 以下である。

カハマルカの場合、首都ワリ遺跡をはじめとする複数の遺跡においてカハマルカ様式土器が出土することが報告されている。そのためカハマルカとワリの間に同盟関係があった [Castillo 2012: 59]、あるいはカハマルカの土器が威信材として用いられたと考える研究者がいる [ルンプレラス 1977: 179; Topic, J. R. and T. L. Topic 2001: 186-187]。ペルー北海岸との関係については、海岸にカハマルカの植民地（colony）があった [Shimada 1994: 251, 259]、両者の間に婚姻関係があったという

考えもある [Isbell 2012: 232, 236-237]。ワリ期においてもカハマルカでは在地のカオリン土器伝統が継続し、ワリの要素を取り入れたカオリン土器はエル・パラシオ遺跡出土土器の中でもごく少数であることは事実である。しかしそれはワリ様式土器の役割、カハマルカ文化におけるカオリン土器の意味から説明すべきであろう。

多くの地域における在地の文化はワリ帝国の時代に急速な変化を遂げた。リマ文化、レクワイ文化、ナスカ文化、モチエ文化はワリ期に終焉を迎えたと認定される。一方で在地の土器様式が大きく変化せず存続したカハマルカ文化の事例はむしろ例外的である。筆者はインカ期とのアナロジーから、ワリの支配下でも土器様式が大きく変化せず存続することはありえること、またそれはカハマルカ社会が中央集権的社会ではなかったことに一因があると考えている [Watanabe 2014]。インカとチムーの間、ワリとモチエの間などに認められるように、中央集権社会間であれば文化の融合がしばしば起こる。しかし、カハマルカにおいてワリの到来以前に中央集権的社会が存在した蓋然性は低く、カハマルカ中期 A のコヨル遺跡などの大遺跡はむしろ祭祀センター的な性格を有している [Watanabe 2009b]。カオリン土器製作が示すように儀礼的紐帶が強い一方で、政治的側面が不明瞭であるという意味で、カハマルカ社会は形成期の神殿社会と類似している [cf. 渡部 2013]。今後、中央側のみならず、在地の社会の特徴を踏まえ、両方向からワリ期の社会間関係と、それに伴う物質文化の特徴を考察する必要がある。

9. おわりに

近年ペルー南高地クスコ地方のエスピリトゥ・パンバ遺跡やペルー北海岸南部のワルメイ川沿いのカスティージョ・デ・ワルメイ遺跡 [プリングル 2014] などでワリ文化の墓が発見され、ワリ帝国モデルに有利なデータが蓄積されつつある（図3）。現在の課題は既存のデータを解釈する枠組みの検討である。同じデータを見ても研究者の間で意見が分かれる現在のワリ研究は発展途上であり、それゆえに今後大きな展開が期待されるテーマである。

行政センターのような大規模な施設が建造されるということは、例えばアンデス形成期の神殿社会に認められるように、国家社会に限定されるわけではない。一方で、旧世界の例のように墓や宮殿として大規模な建造物が建設されることはアンデスでは明確ではない。どのようなプロセスを経て、アンデスの大規模建築の伝統からワリ帝国やインカ帝国の行政センターが生まれたのか、モニュメンタリティーという視点から通時的に比較考察することが今後の課題である。

【謝辞】

本論文は第54回国際アメリカニスト会議における研究報告 “El concepto de centro administrativo: el caso de El Palacio, sierra norte del Perú” (2012年7月19日、ウィーン大学) を基にしている。本研究は科学研究費補助金（若手研究（A））「古代アンデスにおける都市構造の研究」（2011-2014年度）の研究成果の一部である。また2014年度南山大学P&P研究奨励金I-A-2の助成を受けて行われた。エル・パラシオ遺跡調査の共同ディレクターである、ミルトン・ルハーン (Lic. Milton Luján) 氏、コラ・リバース (Lic. Cora Rivas) 氏には、全面的な協力を得た。また、ロサ・エリサベス・メスタンサ (Rosa Elizabeth Mestanza) さんには図面作成をお願いした。2名の匿名の査読者には本論文を書き直す際

に有益なコメントをいただいた。記して感謝したい。

註

- (註 1) 巡察とは、植民地時代に納税の効率化を図るために実施されたいわゆる国勢調査である。主に納税人口の把握を主たる目的とし、各地の実態が記録された。
- (註 2) 本論文では「首都」「帝国」「都市」といった西洋的概念を便宜上用いている。それぞれの含意するところは、アンデスと他地域では異なる部分があり、それを浮き彫りし、意識しつつ用いる必要がある。本論文では都市と行政センターを比較しているが、他の概念についても今後そうした議論が必要である。
- (註 3) 例えばワマチュコを小規模な第 3 次センターとしている [cf. Topic 2013: 46]。
- (註 4) Iten mandamos que haya otro Cuzco en Quito, y otro en Tumi, y otro en Guánuco, y otro en Hatauncolla, y otro en las Charcas, y la cabeza que fuese el Cuzco, y que adjuntasen de las provincias a las cabezas al Consejo, y fuese ley.
- (註 5) アンデス考古学でアリバロスと一般に呼ばれる尖底壺からコップに酒が注がれ、飲み交わされ、コップは2つペアで用いられた。木製コップのケロだけでなく、金製、銀製のコップであるアキリヤも使用された。

引用文献

Anónimo

1920 [ca.1575] *Relación del origen e gobierno que los Ingas tuvieron y del que había antes que ellos señoreasen a los indios deste reino y de que tiempo y de otras cosas que al gobierno convenía, declaradas por señores que sirvieron al Inga Yupangui y a Topainga Yupangui a Guainacapac y a Huascar Inga.* In *Informaciones sobre el Antiguo Perú*, edited by H. H. Urteaga, pp. 57-86. Colección de Libros y Documentos Referentes a la Historia del Perú, 2a. serie, Tomo III, Lima.

Bertonio, Ludovico

2006 [1612] *Vocabulario de la Lengua Aymara*. Ediciones El Lector, Arequipa.

Betanzos, Juan de

2010 [1557] *Suma y Narración de los Incas*. Edición, introducción y notas: María del Carmen Martín Rubio. Fondo Editorial de la Unidad de Post Grado de la Facultad de Ciencias Sociales, Universidad Nacional Mayor de San Marcos, Lima.

Bracamonte, Edgar

2012 La Tumba 21: un contexto del Horizonte Medio en Huaca Santa Rosa de Pucalá, valle de Lambayeque. In *XVII Congreso Peruano del Hombre y la Cultura Andina y Amazónica*, edited by F. Zubieta Núñez, pp. 229-253. Tomo IA. Universidad Nacional José Faustino Sánchez Carrión, Huacho.

Castillo, Luis Jaime

2001 La presencia de Wari en San José de Moro. *Boletín de Arqueología PUCP* 4[2000]: 143-179.

- 2012 Looking at the Wari Empire from the Outside In. In *Wari: Lords of the Ancient Andes*, edited by S. E. Bergh, pp. 47-61. Thames & Hudson, New York.
- シエサ・デ・レオン (Cieza de León, Pedro de)
- 2006 [1553] 『インカ帝国史』(増田義郎訳), 岩波書店, 東京.
- 2007 [1553] 『インカ帝国地誌』(増田義郎訳), 岩波書店, 東京.
- Cobo, Bernabé
- 1964 [1653] *Historia del Nuevo Mundo*. Biblioteca de Autores Españoles, Tomos 91-92. Ediciones Atlas, Madrid.
- Cook, Anita G.
- 2001 Huari D-shaped Structures, Sacrificial Offerings, and Divine Rulership. In *Ritual Sacrifice in Ancient Peru*, edited by E. P. Benson and A. G. Cook, pp. 137-163. University of Texas Press, Austin.
- Cummins, Thomas B. F. (カミンズ、トマス)
- 2002 *Toasts with the Inca: Andean Abstraction and Colonial Images on Quero Vessels*. University of Michigan Press, Ann Arbor.
- 2012 「インカの美術」(武井摩利訳), 『インカ帝国-研究のフロンティア』(島田泉・篠田謙一編), pp. 209-239. 国立科学博物館叢書 12. 東海大学出版会, 秦野.
- D'Altroy, Terence N. (ダルトロイ、テレンス)
- 2005 Remaking the Social Landscape: Colonization in the Inka Empire. In *The Archaeology of Colonial Encounters: Comparative Perspectives*, edited by G. J. Stein, pp. 263-295. School of American Research Press, Santa Fe.
- 2012 「インカ帝国の経済基盤」(竹内繁訳), 『インカ帝国-研究のフロンティア』(島田泉・篠田謙一編), pp. 121-149. 国立科学博物館叢書 12. 東海大学出版会, 秦野.
- Farrington, Ian
- 1998 The Concept of Cusco. *Tawantinsuyu* 5: 53-59.
- 2013 *Cusco: Urbanism and Archaeology in the Inka World*. Ancient Cities of the New World. University Press of Florida, Gainesville.
- ガルシラーゾ・デ・ラ・ベガ、インカ (Garcilaso de la Vega, Inca)
- 2006 [1609] 『インカ皇統記』(牛島信明訳), 4巻, 岩波書店, 東京.
- González Holguín, Diego
- 1989 [1608] *Vocabulario de la Lengua General de Todo el Perú Llamada Lengua Qquichua o del Inca*. Universidad Nacional Mayor de San Marcos, Lima.
- Grosboll, Sue
- 1993 …And He Said in the Time of the Ynga, They Paid Tribute and Served the Ynga. In *Provincial Inca: Archaeological and Ethnohistorical Assessment of the Impact of the Inca State*, edited by M. A. Malpass, pp. 44-76. University of Iowa Press, Iowa City.
- Guaman Poma de Ayala, Felipe
- 1987 [ca.1615] *Nueva Crónica y Buen Gobierno*. Edición, introducción y notas de John V. Murra, Rolena Adorno y Jorge L. Urioste. Crónica de América. Núm. 29a-b-c. 3 vols. Historia 16, Madrid.

Hyslop, John

- 1984 *The Inka Road System*. Academic Press, New York.
- 1985 *Inkawasi: The New Cuzco*. BAR International Series 234. British Archaeological Reports, Oxford.
- 1990 *Inka Settlement Planning*. University of Texas Press, Austin.

Isbell, William H.

- 1988 City and State in Middle Horizon Huari. In *Peruvian Prehistory*, edited by R. W. Keatinge, pp. 164-189. Cambridge University Press, Cambridge.
- 1991 Huari Administration and the Orthogonal Cellular Architecture Horizon. In *Huari Administrative Structure: Prehistoric Monumental Architecture and State Government*, edited by W. H. Isbell and G. F. McEwan, pp. 293-315. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.
- 2012 Middle Horizon Imperialism and the Prehistoric Dispersal of Andean Languages. In *Archaeology and Language in the Andes: A Cross-Disciplinary Exploration of Prehistory*, edited by P. Heggarty and D. Beresford-Jones, pp. 219-245. The British Academy and Oxford University Press, Oxford.

Isbell, William H. and Gordon F. McEwan (editors)

- 1991 *Huari Administrative Structure: Prehistoric Monumental Architecture and State Government*. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.

Julien, Daniel George

- 1988 Ancient Cuismancu: Settlement and Cultural Dynamics in the Cajamarca Region of the North Highlands of Peru, 200 B.C.-A.D. 1532. Ph.D. dissertation, Department of Anthropology, University of Texas at Austin.

Lau, George F.

- 2005 Core-Periphery Relations in the Recuay Hinterlands: Economic Interaction at Chinchawas, Peru. *Antiquity* 79: 78-99.
- 2014 Intercultural Relations in Northern Peru: The North Central Highlands during the Middle Horizon. *Boletín de Arqueología PUCP* 16 [2012]: 23-51.

ルンブレラス、ルイス

- 1977 [1974] 『アンデス文明—石期からインカ帝国まで』 (増田義郎訳), 岩波書店, 東京.

マコフスキ、クシィストフ

- 2012 「都市と祭祀センター—アンデスにおける都市化についての概念的挑戦」 (渡部森哉訳), 『年報人類学研究』 2: 1-66.

McEwan, Gordon F. (editor)

- 2005 *Pikillacta: The Wari Empire in Cuzco*. University of Iowa Press, Iowa City.

Menzel, Dorothy

- 1964 Style and Time in the Middle Horizon. *Ñawpa Pacha* 2: 1-105.

Morris, Craig

- 2013 *El Palacio, la Plaza y la Fiesta en el Imperio Inca*. Colección Estudios Andinos 13. Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú, Lima.

Morris, Craig and R. Alan Covey

- 2005 La plaza central de Huánuco Pampa: espacio y transformación. *Boletín de Arqueología PUCP* 7 [2003]: 133-149.
- Morris, Craig and Donald E. Thompson
 1985 *Huánuco Pampa: An Inca City and Its Hinterland*. Thames and Hudson, London.
- Murra, John V.
 2002 *El Mundo Andino: Población, Medio Ambiente y Economía*. Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú/Instituto de Estudios Peruanos, Lima.
- Nash, Donna J. and Patrick Ryan Williams
 2009 Wari Political Organization. In *Andean Civilization: A Tribute to Michael E. Moseley*, edited by J. Marcus and P. R. Williams, pp. 257-276. Monograph 63. Cotsen Institute of Archaeology, University of California, Los Angeles.
- ナイルズ, スザン
 2012 「インカ王領とは?—建築、経済、歴史」(徳江佐和子訳),『インカ帝国—研究のフロンティアー』(島田泉・篠田謙一編), pp. 289-304. 国立科学博物館叢書 12. 東海大学出版会, 秦野.
- 大平秀一
 2008 「インカ北方領域における武力抗争」,『他者の帝国—インカはいかにして「帝国」となったか』(閔雄二・染田秀藤編), pp. 226-246. 世界思想社, 京都.
- Ogburn, Dennis
 2004a Evidence for Long-Distance Transportation of Building Stones in the Inka Empire, from Cuzco, Peru to Saraguro, Ecuador. *Latin American Antiquity* 15(4): 419-439.
 2004b Power in Stone: The Long-Distance Movement of Building Blocks in the Inca Empire. *Ethnohistory* 55(2): 287-319.
- Ortiz de Zúñiga, Ihigo
 1967/1972 [1562] *Visita de la Provincia de León de Huánuco*. 2 vols. Universidad Hermilio Valdizán, Huánuco.
- Pachacuti Yamqui Salcamayhua, Joan de Santa Cruz
 1993 [1613] *Relación de Antigüedades deste Reyno del Pirú*. Estudio etnohistórico y lingüístico de Pierre Duviols y César Itier. Travaux de L'Institut Français d'Études Andines 74, Archivos de Historia Andina 17. Institut Français d'Études Andines/Centro de Estudios Regionales Andinos "Bartolomé de Las Casas", Lima/Cuzco.
- Pärssinen, Martti
 1992 *Tawantinsuyu: The Inca State and Its Political Organization*. Studia Historica 43. Societas Historica Finlandiae, Helsinki.
- Pärssinen, Martti and Ari Siiriäinen
 1997 Inka-Style Ceramics and Their Chronological Relationship to the Inka Expansion in the Southern Lake Titicaca Area (Bolivia). *Latin American Antiquity* 8(3): 255-271.
- プリン格尔、ヘザー
 2014 「ペルー 深紅の王墓」,『ナショナルジオグラフィック日本版』20(6): 82-103.

- Ramírez, Susan Elizabeth
 2005 *To Feed and Be Fed: The Cosmological Bases of Authority and Identity in the Andes*. Stanford University Press, Stanford.
- Ravines, Rogger
 1985 *Cajamarca Prehispánica: inventario de Monumentos Arqueológicos*. Inventarios del Patrimonio Monumental del Perú 2. Instituto Nacional de Cultura – Cajamarca/Corporación de Desarrollo de Cajamarca, Cajamarca.
- Reichlen, Henry and Paule Reichlen
 1949 Recherches archéologiques dans les Andes de Cajamarca: premier rapport de la Mission Ethnologique Française au Pérou Septentrional. *Journal de la Société des Américanistes* 38: 137-174.
 ロストウォロフスキ、マリア
 2003 [1988] 『インカ国家の形成と崩壊』(増田義郎訳), 東洋書林, 東京.
- Rowe, John Howland
 1956 Archaeological Explorations in Southern Peru, 1954-1955. *American Antiquity* 22(2): 135-151.
- Santillán, Hernando de
 1968 [1563?] Relación del origen, descendencia, política y gobierno de los Incas. In *Crónicas Peruanas de Interés Indígena*, edited by F. Esteve Barba, pp. 97-149. Biblioteca de Autores Españoles, Tomo 209. Ediciones Atlas, Madrid.
- Santillana, Julián I.
 2012 *Paisaje Sagrado e Ideología Inca: Vilcas Huaman*. Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú, Lima.
- Sarmiento de Gamboa, Pedro
 1943 [1572] *Historia de los Incas*. Segunda edición, enteramente revisada. Emecé Editores, Buenos Aires.
 シエレルップ、インゲ
 2012 「山々を越えて、セハ・デ・セルバへ下って：チャチャボヤス地域におけるインカの戦略と影響」(森下壽典訳), 『インカ帝国-研究のフロンティア』(島田泉・篠田謙一編), pp. 351-371. 国立科学博物館叢書 12. 東海大学出版会, 泉野.
- Schreiber, Katharina J.
 1991 The Association between Roads and Polities: Evidence for Wari Roads in Peru. In *Ancient Road Networks and Settlement Hierarchies in the New World*, edited by C. D. Trombold, pp. 423-252. Cambridge University Press, Cambridge.
 1992 *Wari Imperialism in Middle Horizon Peru*. Anthropological Papers No.87. Museum of Anthropology, University of Michigan, Ann Arbor.
 2001 The Wari Empire of Middle Horizon Peru: The Epistemological Challenge of Documenting an Empire without Documentary Evidence. In *Empires: Perspectives from Archaeology and History*, edited by S. E. Alcock, T. N. D'Altroy, K. D. Morrison and C. M. Sinopoli, pp. 70-92. Cambridge University Press, Cambridge.
- Seki, Yuji and Clorinda Tejada

- 2003 *Informe Preliminar del Proyecto de Investigaciones Arqueológicas en el Valle de Cajamarca, Perú (Temporada 2003)*. Instituto Nacional de Cultura, Lima.
- Seki, Yuji and Juan Ugaz
- 2002 *Informe Preliminar del Proyecto de Investigaciones Arqueológicas en el Valle de Cajamarca, Perú (Temporada 2002)*. Instituto Nacional de Cultura, Lima.
- Seki, Yuji, Juan Ugaz and Shinya Watanabe
- 2001 *Informe Preliminar del Proyecto de Investigaciones Arqueológicas en el Valle de Cajamarca, Perú*. Instituto Nacional de Cultura, Lima.
- Shady, Ruth
- 1988 La época Huari como interacción de las sociedades regionales. *Revista Andina* 6(1): 67-99.
- Shimada, Izumi
- 1994 *Pampa Grande and the Mochica Culture*. University of Texas Press, Austin.
- Terada, Kazuo and Ryozo Matsumoto
- 1985 Sobre la cronología de la tradición Cajamarca. In *Historia de Cajamarca I: Arqueología*, edited by F. Silva Santisteban, W. Espinoza Soriano and R. Ravines, pp. 67-89. Instituto Nacional de Cultura – Cajamarca, Cajamarca.
- Topic, John R.
- 1991 Huari and Huamachuco. In *Huari Administrative Structure: Prehistoric Monumental Architecture and State Government*, edited by W. H. Isbell and G. F. McEwan, pp. 141-164. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.
- 2013 De «audiencias» a archivos: hacia una comprensión del cambio en los sistemas de registro de la información en los Andes. In *El Quipu Colonial: Estudios y Materiales*, edited by M. Curatola Petrocchi and J. C. de la Puente Luna, pp. 33-63. Colección Estudios Andinos. Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú, Lima.
- Topic, John R. and Theresa Lange Topic
- 1992 The Rise and Decline of Cerro Amaru: An Andean Shrine during the Early Intermediate Period and Middle Horizon. In *Ancient Images, Ancient Thought: The Archaeology of Ideology*, edited by A. S. Goldsmith, S. Garvie, D. Selin and J. Smith, pp. 167-180. Archaeological Association, University of Calgary, Calgary.
- 2001 Hacia la comprensión del fenómeno Huari: una perspectiva norteña. *Boletín de Arqueología PUCP* 4 [2000]: 181-217.
- Topic, Theresa Lange and John R. Topic
- 1987 Huamachuco Archaeological Project: Preliminary Report of the 1986 Field Season. *Trent University Occasional Papers in Anthropology* 4: 1-40, Peterborough, Ontario.
- 2010 Contextualizing the Wari-Huamachuco Relationship. In *Beyond Wari Walls: Regional Perspectives on Middle Horizon Peru*, edited by J. Jennings, pp. 188-212. University of New Mexico Press, Albuquerque.
- Tschauner, Hartmut and William H. Isbell

- 2014 Conchopata: urbanismo, producción artesanal e interacción interregional en el Horizonte Medio. *Boletín de Arqueología PUCP* 16 [2012]: 131-163.
- Tuni, Carlos and Louis Tesar
- 2011 The Pikillacta 2004 Eastern Gate Offering Pit. *Ñawpa Pacha* 31(1): 1-44.
- Watanabe, Shinya (渡部森哉)
- 2002 Wari y Cajamarca. *Boletín de Arqueología PUCP* 5 [2001]: 531-541.
- 2007 「インカ国家における地方支配—ペルー北部高地カハマルカ地方の事例」,『国立民族学博物館研究報告』32(1): 87-144.
- 2009a 「インカ帝国における多民族・多文化状況」,『地球時代の多文化共生の諸相—人が繋ぐ国際関係』(浅香幸枝編), pp. 197-218. 行路社, 大津.
- 2009b La cerámica caolín en la cultura Cajamarca (sierra norte del Perú): el caso de la fase Cajamarca Media. *Bulletin de l'Institut Français d'Études Andines* 38(2): 205-235.
- 2009c 「ペルー北部高地、エル・パラシオ遺跡の発掘調査—2008年」,『古代アメリカ』12: 123-139.
- 2010 『インカ帝国の成立—先スペイン期アンデスの社会動態と構造』, 春風社, 横浜.
- 2011 Continuidad cultural y elementos foráneos, en Cajamarca, sierra norte del Perú: el caso del Horizonte Medio. *Boletín de Arqueología PUCP* 14 [2010]: 221-238.
- 2013 「アンデス文明形成期の神殿社会」,『人類学研究所研究論集』1: 33-52.
- 2014 Sociopolitical Dynamics and Cultural Continuity in the Peruvian Northern Highlands: A Case Study from Middle Horizon Cajamarca. *Boletín de Arqueología PUCP* 16 [2012]: 105-129.
- Watanabe, Shinya and Milton R. Luján Dávila
- 2011 *Informe del Proyecto de Investigación Arqueológica en El Palacio – Sector B, Cajamarca. Segunda Temporada, 2010*. Ministerio de Cultura, Lima.
- Watanabe, Shinya and José Luis Peña Martínez
- 2009 *Informe del Proyecto de Investigación Arqueológica en El Palacio – Cajamarca, 2008*. Instituto Nacional de Cultura, Lima.
- Watanabe, Shinya and Cora Rivas Otaiza
- 2013 *Informe del Proyecto de Investigación Arqueológica El Palacio – Cajamarca. Tercera Temporada, 2012*. Ministerio de Cultura, Lima.
- Williams, Carlos and José Pineda
- 1985 Desde Ayacucho hasta Cajamarca: formas arquitectónicas con filiación Wari. *Boletín de Lima* 7(40): 55-61.
- Williams, Patrick Ryan
- 2001 Cerro Baúl: A Wari Center on the Tiwanaku Frontier. *Latin American Antiquity* 12(1): 67-83.
- 2002 Rethinking Disaster-Induced Collapse in the Demise of the Andean Highland States: Wari and Tiwanaku. *World Archaeology* 33(3): 361-374.
- Zapata Rodríguez, Julinho
- 1998 Arquitectura y contextos funerarios wari en Batan Urqu. *Boletín de Arqueología PUCP* 1 [1997]: 165-206.

Centros administrativos y dominio provincial en el Imperio wari : el caso del sitio arqueológico El Palacio, sierra norte del Perú

Shinya Watanabe
(Universidad Nanzan)

Palabras clave: estado, imperio, centro administrativo, ciudad, inca, wari, Cajamarca

Los centros administrativos del Imperio inca no fueron el lugar donde vivían de manera permanente los pobladores, a diferencia de las ciudades europeas. Constituyeron los aparatos del dominio provincial y estaban conectados por la red de caminos con el Estado centralizado. Desde ahí se controlaban los bienes y la realización de labores, además de llevarse a cabo las ceremonias rituales. El Imperio wari, al que se trata, con frecuencia, como el prototipo del Imperio inca, también construyó centros administrativos para el control de las provincias bajo su hegemonía; sin embargo, existen diferencias entre los centros correspondientes a cada uno de estos Estados expansivos: en los centros incas se presentan los planos abiertos con acceso libre y se recupera gran cantidad de cerámica del estilo Inca, mientras que los centros wari muestran los planos cerrados con acceso muy controlado y solo se documenta poca cantidad de cerámica del estilo Wari. Asimismo, se pueden clasificar los centros administrativos wari en dos tipos: el primero consiste de los centros de arquitectura de planta ortogonal, mientras que el segundo lo forman los centros con conjuntos de arquitectura de planta irregular. Se supone que en los centros del primer tipo vivía poca gente de manera permanente, tal como en el caso de los centros administrativos incas, mientras que en los centros del segundo tipo hubo relativamente alta densidad demográfica, con lo que se semejan a la capital imperial de Huari.

El Palacio consiste de un centro administrativo del segundo tipo del Imperio wari, ubicado en la región de Cajamarca, sierra norte del Perú, por lo que se piensa que dicho territorio estaba bajo su dominio directo. En este complejo se han documentado estructuras arquitectónicas y funerarias de la cultura wari, mientras que la mayoría de los tiestos recuperados fueron de la cultura Cajamarca. Sería muy singular el hecho de una fusión cultural entre la sociedad centralizada wari y la no centralizada cajamarquina, y ello brindaría una razón para que se mantuviera la tradición alfarera local.

原稿受領日 2014年7月7日
原稿採択決定日 2014年9月4日